

まんぐを言うにいった

大阪 二年 ひろのぶ

一月十七日土曜日、学校から帰ってからぼくは、お母さんに、「生活科のノート、もうないから、買いにいってくる。」

と言って、引き出しから自分のお金を三百円出して山本ぶんぐ店へいききました。ノートは百五十円だけど、いちおう、三百円もっていきました。

山本ぶんぐ店でぼくは、生活科ノートをおばちゃんに見せました。おばちゃんは、

「三百円。」

と言いました。ぼくは、

「たかいわ、いつもとちがうわ。」

と言いました。おばちゃんは、

「たかいもくそもあらへん。」

とこわい顔をして言いました。ぼくは、三百円をはらいました。

家に帰ってぼくはお母さんに、

「山本ぶんぐ店、たかかったで。」

と言いました。お母さんは、

「そう。」

と大きな声で言いました。

昼ごはんを食べると、一時でした。ぼくは、だんだんはらがたってきました。山本ぶんぐ店へまたいききました。おばちゃんがいました。ぼくはおばちゃんに、

「いつもと、ねだんちがうで。」

と言いました。おばちゃんは、

「そんじゃ、買ったのと同じノート見せてみ。」
とまたおこった顔で言いました。ぼくはさっきと同じノートをもって、おばちゃんにわたしました。おばちゃんはノートの後ろを見ました。おばちゃんは、
「あっ。」
と小さい声で言いました。
「ごめん、おばちゃんがあるかった。」
と言いました。おばちゃんは、ポケットから百五十円を出しました。ぼくは、
「うん。」
と言って、百五十円をもらいました。
帰るときぼくは、すっきりしました。



(指導 増田俊昭)